

# 一 私の生いたち

嬰兒・幼児 広島県沼隈郡千年村字常石、神原嘉平治の五女として私は生まれた。父嘉平治は私の生後八カ月の時代と家庭 病死し、また母は十人目の私を産み、産後の経過悪くしばらく病床にあつたが、私が生後三カ月の

とき、遂に黄泉の客となつた。したがつて、両親の顔は全然知らぬ私である。

兄五人、姉四人と私、あわせて十人兄弟である。長姉ソルは、私より二十歳年上で、私が生まれおちると、母親代わりとなつて母乳の一滴もない嬰兒の私をかかえて、貰い乳や重湯によつて私を育ててくれた由である。

私が三歳のとき、姉は同村字能登原、市川卯之助に嫁いたので、私の養育の責任は次姉ユキの手に渡つたのである。また、この姉も私が六歳のとき、沼隈郡浦崎村の渡辺伝一郎と結婚したが、不幸にして離婚の運命となり、しばらく家にもどり私の養育にあつてはいたが、私が十歳のとき、豊田郡大長村の天下豊市氏と再婚したため、その後の私の養育は私より八歳年上の四姉ヌイ（三姉トラは若くして病死）の手に委ねられたわけである。

義長兄（腹違いの兄）直吉は分家してはいたが病弱であつたため、二子を残して若くしてこの世を去つた。次兄巳之吉がその後へおさまつたが、これまた身体弱く病気がちであつたが、私が十五歳のとき病死した。父の死後の神原家を継いだのは、私より十八歳年上の三兄勝太郎である。父は死が迫つたとき、「勝太郎よ、ミキをたのみぞ。親に代わつて育ててやつてくれ。」と目に涙を浮かべて言い残して逝つたという。

長姉、次姉の話や、三兄勝太郎の伝記によれば、私の生家神原家は、祖父の代は千石船（御用船）三隻もあつて、

ずいぶん隆盛であつたらしい。祖父の末年から父の代になつて、御用船も不用となり、したがつて船業不振から財も次第に減少し、そのうえ父が他人の借金の保証人となり、全財産を没収され赤貧となつた。

そのころに私は生まれたのである。母が四十一歳のときである。思うに、母が私を産んで立ち上がることができなかったのは、貧困のどん底の中で大勢の子供の養育と、家計を助けるために骨を碎き身を粉にして働き続けてきており、精魂がつき果てていたからであらうと思う。

両親の顔を知らぬ私も不幸であるが、それよりも嬰兒の私を残してあの世へ逝かねばならぬ運命にあつた父母は、どんなに辛い苦しい思いをして去つたことであらうかと思うと、たまらなく胸がつまり熱い涙が流れるのである。

#### 家族と私の養育

私を嬰兒からはぐくみ育ててくれた長姉の嫁入りのときは、私は三歳（数え年で）のときであつた。家族と私から全然記憶にないが、姉は私を置いて嫁いだので気にかかり、たびたび訪れてくれていたらしい。姉が来れば、飛びついて抱かれていたことを、四歳頃からかすかに覚えていた。また、姉の家に連れて帰つてくれているが、それがその当時の私の一番大きな喜びであつた。

姉には男三人と娘一人の四人の子がいたが、姉はその四人の自分の子供を育てるよりも私一人を育てる方が辛かつた、でもまた、喜びも大きかつたと申しておつた。それもそのはず、若い娘の手で母乳など一滴もないのに嬰兒を育てるのだから。偉い子に育てようなどという余裕はなかつた、ただ死なないで育ってくればよいがということだけで一杯であつたと言つていた。

長姉の手から次姉の手に渡つた三年目に、また次姉も嫁入りという時期がきた。そのとき、私は姉の白無垢の花嫁姿にかぐりついて泣いたことを覚えていた。結婚式に出る人、また見送る人、そこに居合わせた人、みんな涙したという話である。

私の兄弟は、前述の如く兄五人・姉四人と私で十人であるが、三姉トヲは若くして腹膜炎を患い、薬石の功なく遂に黄泉よみの客となった由である。また五男庄兵は、これも少年時代から乗船業に従事していたが、不幸にして十二歳のときに船が遭難し水没死した由である。若くして逝つた兄と姉は、青春の夢も見ずこの世を去られたかと思うと、いたわしく胸が痛くなるのを覚える。

次姉の結婚後の私の家庭は、三兄勝太郎、四兄宗一と四姉ヌイと私の四大家族であつた。一人の兄は乗船業なので、いつも家にいなかったたので、八歳年上の姉と二人暮しであつた。十五、六歳の姉は私の親代わりとなり、また一家の主婦代わりとなつて家の世話をしてくれていた。もちろん、長姉も次姉も幼い妹二人の暮しを気遣つてたびたび訪れて、色々とい類や食事などの面倒をみてくれた。

三男勝太郎兄は、家に帰ると私の手首を握つてみて、「よく肥えたのー。」とか、「痩せたのではないか。」とか、「食べるものはうまいものをしっかり食べねばいかぬぞー。」と言つて気遣つてくれたことを覚えてゐる。四姉も年齢はわずか八歳しか違わぬのにすっかり母親気分で、色々といよく面倒をみてくれたことは、深く印象に残つてゐる。

そのなかでとても嬉しく忘れられぬ一つとして、私はいつも昼食は家に帰つてしていたのだが、ある雨の降る日に、姉はわざわざ白いご飯を炊いて私の大好物の高野豆腐を煮て弁当を作り、学校へ持つて来てくれたことがある。温かくてとてもおいしかったこと、姉の愛情の細やかなこと、思いやりの深いこと、母性愛の強かつたこと、私は小さい胸一杯にこみあげるもののあるのを覚えた。それが今も忘れられない思い出として残つてゐる。

この姉と暮すこと六カ年余、姉は私が十一歳のとき、私の家の本家であり、また神原家総本家の神原熊吉のもとに嫁いだ。それと相前後して三兄勝太郎の嫁としてヒサ義姉さんが来た。

種々の事情で零落した家の再興を心に誓つて孤軍奮闘していた四兄宗一は、その大理想も果たし得ず、二十一歳の

若き身で、福岡県若松港沖にて船中でのガス中毒のため死んだのである。小さい船にしろ、一人で船を持ち一人で船に乗っていたところをみれば、頑張り強い努力家の兄であったようである。勝太郎兄は、この宗一兄の死を非常に悔い、残念がっていた。察するに、それは自分の船に乗っていたらこんなことはなかったらうにという無念さが、勝太郎兄の頭から一生去らなかつたからではないかと思われる。

幼児・小児時代は、貧乏な家庭で、このような家族構成で成長してきたのであるが、貧乏だから、親がいないから、淋しいだのあさましいだのといった意識はあまり持たなかつた。それは今にして思うに、兄や姉が温かくはぐくみ育ててくれたことと、生まれおちてから親の手で育てられていないので、親の味を知らぬせいもあったからでもある。兄や姉が他人様に「この子は他家のお子さんみたいに手に手を入れて育つたのではない。一人で大きくなったので、家庭教育・躾教育など何もしていません。たとえば、庭園の庭木のように手入れして立派に美しく眺めのよい庭木でなく、野原の樹木と同じように手入れなしの木で、伸びたいほうだい伸び、はびこりたいほうだいはびこつた木と同じようなものです。」と言っていたことも覚えている。それは、確かに上品さや気品には欠けていたかも知れぬが、伸びようとする芽を扱われることはなかつたと思う。また、甘え心を持たなかつたことは確かで、すなわち依存心を持たず（小さい時から）自分の事は自分でしていた。例をあげれば、五、六歳頃から自分のハンカチは自分で洗うとか、七、八歳頃からは、下駄の鼻緒が切れれば自分でたてて履くとか、小学校二年生頃からは姉と一緒に炊事・洗濯などをするとか、学校の勉強も家の者にせよといわれてからでなく、自分からやるといった習慣はよくついていたと思う。

#### 小児時代の

#### 思 い 出

私の幼児時代の友人は、近所のシズエさん、タミヨさん、ミツエさん、キサヨさん、私の姪のヤスヨさんなどであった。現在は、姪のヤスヨさん以外の人とは音信も途絶えているが、お健やかに晩

年をお過ごしになつていらつしやることを祈つている。

三、四歳頃からこの人たちと遊び、また学童時代を送つてきたので、色々と数多くの想い出があるが、私が四歳頃であつたと思うが、姉からおやつに薩摩芋の蒸したのを一つもらつて食べようと思つていたところへ、前の道にヤスヨさんが現れたので、ヤスヨさんにその薩摩芋をあげようと思つて、もう一つもらつて出て声をかけたところ、ヤスヨさんは、定一さんという男の子の友人と手をつないで、一方の手に長い紐のついた巾着めんぢやくを持つていた。その巾着を振りながら、私の方に心をよせず、下中というお店におやつ菓子を買に行くのだからといふのです。そのときは、私もおぼろげながらもいささか劣等感なるものを感じたようである。

今一つ深く印象に残つてゐることは、私が小学校二年生頃であつたと思うが、私の家から四百メートルくらいにある同じクラスのシズエさん宅の庭で、四、五人の友人と日が暮れるのも忘れて遊んでいたら、日没とともに目が見えなくなつてしまつたので、我が家まで四つ這いで帰つて来たことがある。そのとき姉はとても心配して、長姉にそのことをさつそく相談した。それは夜盲症にかつたのだといふ。その手当てとして姉は、鶏の肝を尾道への渡海船に依頼して買つてきてもらい、私に食べさせてくれた。すると三日くらいで、まったく日が暮れても夜が明けても以前と同じように目はよく見えるようになったので、姉たちはほつとしたようであつた。當時を顧みるに、年少の姉との家庭生活なので、バランスのとれた栄養的献立などできなかつたのであらうと思ふ。すなわちビタミンAが欠乏してゐたのであらう。

小学校五年の夏、三兄勝太郎の妻、すなわち義姉が嫁入りしてきたのであるが、そのころの兄は乗船中なので、家の中はその義姉と今まで一緒だつた四姉と私の三人暮しであつたが、間もなく四姉は前述の如く神原家の総本家に嫁いだ。遂に私は肉親の手から離れてしまつたのである。

生まれ落ちて十一年間、三人の姉を親と慕い、姉たちも私を我が子として育ててくれた。そのため別れは実に辛かった。しかし、幸いに四姉は家が上下に並んでいたもので、朝な夕な顔も合わされるし、また面倒もみてくれていた。義姉は賢明で勝気で口八丁手八丁の人で、俗にいう「やり手のしゃんしゃん」の人であった。なかなか馴染めなくて、色々と苦勞をした。気分の良いときには良くして下さるのだが、悪いときにはとても辛く当たられた。悪いときの方が多く、時によつては長姉の家にしばらく身を寄せていたことも何度かあった。

このころから、自分の境遇の憐れさを感じ、時には劣等感を持つようになった。

### 小学校時代

私の母校の尋常小学校は、常石の八幡神社の下に所在していて、外常石区の者のみの就学する複式の三学級で、児童総数は百余名だった。先生は、校長先生、家庭科の先生（家庭科の先生は隔日出勤）、三人の学級主任、計五人という、小規模でこぢんまりとした小学校であった。

私は今でもそうであるが、小さい時から感受性が強かったようである。小学校三年生頃から、修身科での例話による諸徳、克己・勉勵・忍耐・節儉・質素等々の教えの一つ一つに強く感銘を受けるとともに、自分もそうでありたいと強く肝に銘じ、自分の年代なりにそれをよく実践してきた。

特に私の心を強く打ったものは、フランクリンの自立自當であった。今にして思うに、これらが私の将来への自己確立の基盤となっている。自立自營心は私の幼少時代からの境遇が然らしめる関係もあつてか、いっそう強く身にしみ込んでいた。すなわち、他に依存しない、自分のことは自分でやるということ、私はこのころから、自分は将来何か独立してやりたい、やろうと考えるようになった。

四年生のときの受持ちが井上マツヨ先生といつて、立派な先生であつた。四年生の終わりごろ、自分は井上先生みたいな先生になりたい、なろうと決心したのである。



常石尋常小学校当時のミキ先生（最後列右端）

感受性の強い現れの一つとして、そのころの私の小学校では、赤穂四十七士の追悼会を十二月十一日の夜に催していたので、それにも三年生頃から毎年参加していたが、義士の行為に感無量のことを覚えていた。そして放課後、家に帰って友人と遊ぶのに、四十七士の討ち入りの時を模倣した遊びをしていた。その配役も自分で決めて、自分が大石良雄になってやっていた。非常に楽しい遊びであったことをよく記憶している。

また、修身科の中に「義を見てせざるを勇無きなり。」とあって、その具体的実践の一つとして、これは小学校六年生のときであったが、最高学年という気分もあってか、便所が下履きで行くようになっていたので、土が上がりきたなく、したがって使用法も悪く、便をかけたりして誠に不衛生であったので、二、三の友人に呼びかけ、便所の上履きを自分たちで藁草履を作って持参し、そして便所の清掃をし、その上履きを備えて、下履きではいっさい行かぬことを先生に申し出て、それを全校児童に実践してもらったようにした。そして毎日毎日自分たちで便所の掃除を六年

生の一年間続けてきた。一年間の内には段々と仲間入りの申込みも増えた。そしてその仲間たちで次々と学校のためになること、人のためになることを考えてはするようにした。

尋常小学校時代、理科系よりか文科系に弱かったようで、図画、音楽、書き方は特に不得意であった。四年生のあの日の午後、授業が綴り方であったとき、教室に入るおり「やれやれあづり方かい。」といったのが、渡辺藤一郎先生の耳に入って、初めからそんな考えだからよい綴り方ができないのだとひどく叱られて立たされた。そして、その時間の私の綴り方を板書されて批判されたことがある。図画も甲をもらったことはほとんどなく、乙か乙上、良くて甲下であった。五年生のとき、天竺葵の花を写生したことがあった。そのとき、どんな風の吹き廻しであったか甲をもらった。嬉しくて飛び上がった。それからその花が好きになり、今でも花の中では一番好きで愛している。それから図画が段々と好きになり、上手とまではいかぬにしても、通知簿に甲がつくようになった。音楽だけは今もって音痴で全然ものにならないのである。文字も数十年も書くが、一向に上手にならない。

しかし、理解と記憶は比較的良い方であった。算術や理科はとても好きであった。誰よりも早くできるので、いつも前に出て黒板でやらされていた。そんなことが非常に痛快であったことを覚えている。

また思い出の中で辛く感じたことは、六年生の中に宝田院（ほうでんいん）（檀那寺）のお嬢さんである三須マサコさんが京都の女学校（本願寺経営）に進学されるので準備教育を受けておられるのを見て（五年生のとき、六年生と複式学級であったので）、とても羨しく思った。四年生から学校の先生になりたいと思っていた私なので、進学にあこがれるのも無理はないことである。しかし、私にはそうした幸運はめぐってこない。六年生になっても、家庭も、また学校の先生も、私の進学など夢にも考えてくれない。私自身もそれを自分から言い出す勇氣もなく、辛いつらい思いをしているうちに、六年生もとうとう終わり卒業した。



しかし、高等小学校へは進めてもらえた。二十余名のクラスメートの中、女子二人、男子四人が高等小学校へ行ったのである。学校は同じ村内であるが、村の中央の草深くさぶかにあった。家から四キロくらいあったが、毎朝、朝食および弁当の仕度をして、大越坂の淋しい林の中を歩いて四キロの道を通学したのである。この二カ年は家庭環境の影響からか、安定感がなく、不安で不愉快な毎日で勉強もふるわなかった。

学校の先生になりたいという心は、常に変わりなく持ち続けていたが、家庭でもそんな話を持ち出す雰囲気ではない。義姉との生活は戦戦恐恐の毎日であった。

二カ年の月日が流れて卒業となった。さて、将来をどうするかという問題であるが、家の者の言い分や考えは、尋常小学校卒で大半の者が仕事をしているのに、高等小学校まで行ったのだから、今後は地方の仕事である畳表を織つて娘時代を過ごし、適齢期が来たら結婚すればよいといった、ごく平凡な考えであった。それも無理からぬこと、當時は高等小学校まで行く者もほとんどいない時代であったからである。